

算数科

1 結果の概要

	数と式の意味と計算	量と測定	図形と計量	数量関係	資料の分析
習熟基準平均%	78.9	73.8	72.0	73.0	73.3
正答率平均%	86.2	84.5	87.2	81.1	87.2
昨年度	82.6	80.3	72.7	87.1	84.7

各領域の正答率は、すべて習熟基準を上回り、算数科の学習内容の定着度は満足できる状態であると判断できます。特に「数量関係」「資料の分析」の2領域については学習内容がしっかり定着していると考えられます。

習熟度別学習を行ったことが有効であったと考えられ、今後も児童の発達の段階をふまえ、この能力に応じた指導を進めていきます。

2 結果の分析と解説

(1) 数と式

※グレーの項目は習熟基準を下回ったもの

		出題のねらい	履修学年	習熟基準%	正答率%
1	①	「3けた+3けた」の筆算のしくみを理解し、計算することができる。	3年	85	98.4
	②	「3けた-3けた」の筆算のしくみを理解し、計算することができる。		80	94.5
	③	「1-真分数」の意味を理解し、計算することができる。		85	81.3
	④	「2けた÷1けた(あまりあり)」の計算のしくみを理解し、計算することができる。		85	93.0
	⑤	「2けた×2けた」の筆算のしくみを理解し、計算することができる。		85	90.6
	⑥	「3けた×2けた」の筆算のしくみを理解し、計算することができる。		75	84.4
	⑦	「何百÷1けた」の計算のしくみを理解し、計算することができる。	4年	80	93.8
	⑧	「3けた÷2けた(あまりあり)」の計算のしくみを理解し、計算することができる。		70	87.5
2	①	「小数+小数」の計算のしくみを理解し、計算することができる。	3年	90	99.2
	②	「小数+小数=整数」の計算のしくみを理解し、計算することができる。		90	96.9
	③	「整数-小数」の計算のしくみを理解し、計算することができる。		80	93.0
	④	「整数-小数(第二位)」の計算のしくみを理解し、計算することができる。	4年	80	84.4
	⑤	「小数(第二位)+小数(第二位)」の計算のしくみを理解し、計算することができる。		85	90.6
	⑥	「小数(第二位)+小数(第三位)」の計算のしくみを理解し、計算することができる。		85	93.0
	⑦	「小数(第一位)-小数(第二位)」の計算のしくみを理解し、計算することができる。		75	82.8
	⑧	「小数(第三位)-小数(第三位)」の計算のしくみを理解し、計算することができる。		75	78.9
5	カードを並べて8けたの最も小さい数をつくることができる。	4年	70	71.1	
6	5けたの数を四捨五入して、上から2けたの概数にすることができる。	4年	80	88.3	
7	小数のしくみを理解し、数直線を読み取ることができる。	3年	80	95.3	
8	小数のしくみを理解し、小数第三位までの数を表すことができる。	4年	80	91.4	
9	わり算のきまりを使って計算し、何倍かを求めることができる。		80	94.5	

この領域では、ほとんどの問題で習熟基準を上回りましたが、減法では、「1-真分数」の計算が習熟基準を下回

りました。計算技能は定着しており、「整数－小数」の正答率が高かったことから、分数の意味理解が定着不足であったと考えられます。また、5. 最も小さい数をつくる問題では、習熟基準を上回っているものの、正答率は高くありません。最も小さい数を書くことはできるが、「○の位の数字は」と問われると、誤答してしまうことから、念頭で答えを求めた結果だと考えられます。大きな数の理解のためには書くことが必要であり、計算過程を書き残すなど、問題に取り組む姿勢を指導する必要があります。

(2) 量と測定

出題のねらい		履修学年	習熟基準%	正答率%
11	ある時刻の25分前の時刻を求めることができる。	3年	85	81.3
	2つの時刻から、その間の時間を求めることができる。		70	80.5
12	長さの単位 km について理解し、問題の状況に適した長さの単位を選ぶことができる。	4年	85	96.9
	面積の単位 m^2 について理解し、問題の状況に適した面積の単位を選ぶことができる。		80	92.2
13	ひょう量 1kg のはかりの目盛りを読み、2つのはかりの重さの差を求めることができる。	3年	60	85.9
14	分度器を使って、決められた大きさの角を作図することができる。	4年	70	80.5
15	ひと組の三角じょうぎを組み合わせてつくった角の大きさを求めることができる。		70	78.1
16	長方形を組み合わせた形の面積を求める式の意味を理解し、求め方の図と一致させることができる。		70	80.5

この領域においては8問中7問が習熟基準を上回りました。学習内容の定着度は、満足できる状況であるといえます。習熟基準を下回った、11. 25分前の時刻については、問題を読み間違えたであろう誤答が最も多く、この領域でも、問題に取り組む姿勢を指導する必要があります。

(3) 図形と計量

出題のねらい		履修学年	習熟基準%	正答率%
17	二等辺三角形の定義を理解し、与えられた3辺の長さから、二等辺三角形にならないものを選ぶことができる。	3年	80	96.1
	球の直径の意味を理解し、図中の長さから球の直径を求めることができる。		75	95.3
18	ひし形の定義を理解し、多数の図の中から、ひし形を選ぶことができる。	4年	70	97.7
	平行四辺形の対角線の特徴を理解し、適切な説明文を選ぶことができる。		60	50.0
19	箱の形の辺の長さに着目し、指定された長さの辺の数を求めることができる。	2年	75	96.9

この領域においては、四角形の性質について、辺や角だけではなく対角線も関連させて学習し理解を深めていく必要があることがわかりました。二等辺三角形の性質や箱の形の辺と面についてはほぼ定着しています。

(4) 数量関係

出題のねらい		履修学年	習熟基準%	正答率%
3	四則混合の計算のしくみを理解し、計算することができる。	4年	70	82.0
	かっこ付四則混合計算のしくみを理解し、計算することができる。 *4年・7年共通問題		70	78.9
	四則に関して成り立つ性質を使って計算することができる。		70	68.0
4	減法の文章問題(求残)を理解し、答えを求めることができる。	3年	85	90.6
10	文字を使った式で、数量を表すことができる。	4年	70	85.9

この領域においては、5問中4問が習熟基準を上回りました。学習内容の定着度は、ほぼ満足できる状況であるといえます。四則混合の計算では()がない場合の計算での誤答が目立ちます。計算問題では安易に暗算をせ

ず、計算過程をノートに書き残し、答え合わせの際は、答えの正誤だけではなく、計算過程を見直し自分の間違いに気がつけるよう指導していきます。

(5) 資料の分析

出題のねらい		履修学年	習熟基準%	正答率%
20	二次元表のつくり方を理解し、空欄に数を埋めて完成させることができる。	4年	70	85.9
21	折れ線グラフの見方を理解し、気温の変わり方の折れ線グラフを読み取ることができる。		80	96.1
	折れ線グラフの傾きから、変化の特徴を理解することができる。		70	79.7

この領域においては、3問が習熟基準に達しています。数値やグラフの関係を理解し、グラフを読む際は、数値を読み取るだけでなく、変わり方など特徴の読み取る学習を多く取り入れて指導を進めていきたいと思えます。

3 結果から明らかになった課題

(昨年度の結果を踏まえた改善・対策についての検証)

- ◇ 四則計算の指導の徹底を図ったために、計算の技能の正答率が向上した。
 - ◇ 指導助手や講師を活用した習熟度別指導の指導形態をとってきたことによって、個に応じたきめ細かい指導が実現でき、基礎・基本の学力を確実に習得させることができた。
 - ◇ 授業を振り返ることで、筋道を立てて考えることができたり、見通し持つことができるようになったりした。
 - ◇ より効率的な解法とはどういうものなのかが分かるようになってきた。
- ① 計算について定着を図ること
 - ・ 小数や分数の意味について常に意識させる学習・指導が必要である。
 - ・ 計算の際に、計算過程を書き残すことを習慣化させる。
 - ・ 計算のあと、答えの正誤だけではなく、計算過程を振り返り自分の計算を見直し、自分がどうして間違えたのかを検証させる。
 - ② 指導計画の妥当性（図形領域等重点とする領域の指導）
 - ・ 各種の学力調査の結果の分析を十分に行い、分析結果を踏まえた年間指導計画を立て、指導内容の重点を明らかにし指導法の改善を図る。
 - ③ 3年生の学習内容について習熟を図ること
 - ・ 既習の学習内容について十分に身に付いていない児童に対する個に応じた学習体制を確立する。関連する単元を学習する導入やまとめ、朝学習、放課後に「東京ベーシックドリル」などを活用し、児童の学力を掌握し、立ち返りや繰り返しの指導を行う。

4 今後の改善・対策

- ① 計算の技能の習熟を図ります
 - ・ 四則計算を確実に習得するために、児童のつまずき、少数の計算を分析し、適切に診断して繰り返し学習する個別指導の時間を確保します。
- ② 指導計画の修正をします。
 - ・ 定着度の不十分な単元を重点課題とし、指導時数を増やします。また、指導方法を改善していきます。特に「図形と計量」項目における「四角形の特徴」についての授業を重点に指導します。
- ③ 指導体制を見直します。
 - ・ 1、2年生は、指導助手を活用したT.T.や少人数指導、配慮を要する児童の個別指導に活用し、工夫して授業に活用します。
 - ・ 3～6年は、全単元で2学級3分割の習熟度別指導・少人数指導を実施し、個を大切にしたい指導を行います。

- ・ 5、6年ステップアップ学習では、四則計算の徹底と課題別学習を実施します。
 - ・ 学力が十分に身に付いていない児童には、関連する単元を学習する導入やまとめ、朝学習、放課後に「東京ベーシックドリル」などを活用し、児童の学力を掌握し、立ち返りや繰り返しの指導を行います。
- ④ 授業観察や研究授業を通して、教師の指導技術の向上を図ります。
- ・ 問題解決型授業を多く取り入れ、算数的な活動を重視して、既習事項や経験などを活用して自力解決すること、さらに児童の話し合いや協働学習によって思考力や表現力の向上を目指していきます。また、ノート指導や学習感想を通して児童の実態や理解度を明らかにし、その後の指導に役立てていきます。
- ⑤ 家庭学習の充実をめざします。
- ・ 家庭と連携して家庭学習のルール作りをしていきます。

5 学力の検証方法

- 学期初めには、東京ベーシックドリル「診断シートA・B」を活用し、児童個々の習熟度を把握・検証します。
- 5月に観点別到達度学力検査（CRT）を行います。児童には繰り返しテストを行い確実に内容を理解させます。結果については、学力向上部・各学年会で分析し、課題を明確にするとともに、指導の重点や授業改善方法を明らかにしていきます。
- 保護者会では主として学力向上のための指導体制について説明し、保護者の理解を得られるようにします。春と秋の個人面談では、学力調査の結果や普段の授業から個々の課題について話し合います。また、ホームページ、学校便り、学年便りで児童の学習習慣が確立できるよう配慮します。